

『夜の寢覚』論 女君の変貌にみる主題

国文学科 三十三回生 森田由香理

序

『無名草子』に「はじめよりただ人ひとりのことにて、散る心もなくしめじめとあはれに、心入りて作り出でけむほど思ひやられて、あはれにありがたきもの」^(注1)と総評されている『夜の寢覚』は、一人のヒロインの生涯が繊細な筆致で描かれた作品である。

ヒロインの心の内面の成長発展する過程を細やかに描写するという作者の内的世界への強い志向は『夜の寢覚』が心理小説としての性格を備えた作品であることを意味している。殊に第三部は「心理劇」によって構成されており、「事」よりも「心」を中心に天人予言「あはれ、あたら人の、いたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな」(44頁)の的の中を確認すべく展開している。さらに、宿世に苦悩する女君を彼女の心理描写によって内面から描こうとしていることから、第三部はこの物語の中で最も興味深い部分であろうと思われる。

以下、本論では第三部における「女君の変貌」を中心に

探求し、作者の執着した「女の物語」における主題を考察したい。^(注3)

(引用は日本古典文学全集『夜の寢覚』(小学館)による。)

本論

第三部における女君

(1) 帝闈入事件

第三部では、女君は数々の苦難(男君との契り、出産、関白との結婚、夫関白・姉との死別)を経て「自らの意志」を持つ女性に成長している。その成長ふりは、男君を驚嘆させる(254・255頁)ほどで、女君は以前の「几帳の陰で嘆きに沈んでいた姫君」から「はっきり物を考える女性」に成長している。^(注4)

この自我意識に目覚め始めた女君に、自分の背負う「あやにくな宿世」を認めさせる事件が起こる。それが帝闈入事件である。平穏な生活を揺るがせる危機に直面して、女君はどのように対処したのか。以下、女君の心中思惟から、

女君の反応を検証していきたい。

女君を思慕する帝は執拗に女君を訪れる。それに対する女君の反応は、

「内の大殿を、さこそさし離れ、おほかたには絶ゆべうもあらぬ筋は、かたがた繁きに、はかなき御返りきこえさするなどをだに、いみじう諫めたまふを、まいて、『みづからきこえさする』など、聞きつけたまはば、いかばかりおぼしのたまはむ」と思ふも、さのみ心置かれむことはたあいなく、捨てがたく、さすがにおぼさるれば、
(285頁)

と、男君に対する気遣いを見せている。

また、宮中の密室で帝と二人っきりの一夜を明かし、「なかなか死ぬる心地して、ものもおぼえ」(294頁)ないほどの混乱の中でさえも、女君の心の中には「あないみじ。内の大臣の聞きおぼさむことよ」(294頁)と男君が存在している。危機に直面して、女君は心の深層部に存在する男君への思いを改めて自覚することになる。

「……なにし、やむごとなき基を見ながら、我はこよなき劣りざまにて、まじらむかたをこそ、すべてあるまじきことにも、あながちにもかけ離れつつ、恨みらるれ。それよりほかに、つゆも怠りありて、聞きうとまれむな……」

(297頁)

女君が男君を避けてきたのは、単に五人の子の母として、また故関白の北の方としての立場を貫くためだけではなかつた。男君に「やむごとなき基」すなわち女一の官という

立派な正妻がいるからである。つまり、しっかりした後見のない我が身では、男君の愛人の一人すらにも相応しいと考えているのである。この女君の男君を避ける理由としての論理は、帝関入事件後の女君の自省にもみられる。女君は、ここに至って、心の奥に潜む男君への深い愛情を認めざるを得ないのである。

結局、危機に直面して、女君の心の中は徹頭徹尾男君への思慕にとらわれているようである。

内の大臣の面影は、ただ今も、このわたりに立ち添ひて見む心地のみして、「そら恐ろしく、むつかしく思ひやる心は、夢にもや見ゆらむ」と思ふさへぞ、わびしきや。
(308頁)

さらに、女君は次のように自省する。

「いみじかりつる心地のまどひのなかにも、まづ『あないみじ。内の大臣、いかに聞きおぼさむ』と、うちおぼゆることのみ、先に立ちつるも、今思ふぞ、あやしき。」
(313頁)

「今となりて、はた、いとやんごとなく、さばかり恐ろしきさまに定まりたまひたるを、我はなにの頼もしげある身の際にてもあらで、今さら靡き寄り、憂しともつらしとも、まだならはぬかたの恨みをさへ添へて、思ひつくさせむと、結びおきける身の契りとならば、『おほかたに、情々しう言ひかはし、頼みをかくるかたはありとも、まことにはうちとけじ』と、深く思ひしみし心ながら、心強くのみ思ひ離るることのみ思ひしかども、そ

れは、ただなるときの、心のすさびにてこそありけれ。」
(313・314頁)

「かかる事の節には、よろづを消ちて、ただかの人の事こそ、恐ろしうも、つつましうも、なのめならずおぼえつるは、おぼろけならずしみにける心にこそ」と思ひ知らるるに (314頁)

「感乱の中で男君のことを氣遣うとは不思議なことである。女一の官の存在の為に男君を避け、氣丈に生きようとしていた自分が、危機に直面すると結局男君を頼りにしてしまふなんて、日頃の態度は氣休めにすぎなかったのだ。」女君は、帝闖入による感乱した状態の中で浮かびあがった男君への深い愛情を客観的な目で見つめている。平常の自制・意志・秩序は、実は非常に脆いものであった。にもかかわらず、女君の自らの隠された内心に向けられた目は意外に鋭いものであったと思われる。そして女君は「おぼろけならずしみにける心にこそ」(314頁)と、男君への思慕の深さを思い知らされた感慨をもちますのである。

以上のように、帝闖入事件は女君に男君への深い愛情を自覚させる大きな契機となった。さらに、ここではっきりと男君への愛を阻止するものが女一の官の存在であることを確認している。

また、帝闖入事件に対する女君の次の自省

「昔より、世をも憂きものと思ひ知り、嘆かしきも、誰ゆゑにもあらず。いみじう心づくしに、物思ひわびさせむと、あやにくに結びおきけむつらさも、うとましから

ぬにもあらず。」(313頁)
は、女君の我が身の背負う「あやにくな宿世」の自覚である(注5)ろうと考えられる。

このように考えてくると、帝闖入事件は、物語構成上、女君に「浅からぬ契りながら、よに心づくしなる」男君との関係と、自らの「いたくものを思ひ、心のみだし給ふべき宿世」の自覚を促す一つの契機として設定されているようである。この事件を通して、凶らずも男君への深い愛情を確認した女君は、今後の人生態度に「女」としての立場を加えることを余儀なくされる。

(2) 生霊事件

帝闖入事件により、心の内で男君を慕っている自分を発見した女君は、その後、男君に自分の本心を打ち明ける。

「もとより、もて離れたてまつる心のあらましときには、いみじくとも、いとかく残りなく、うちとけ頼みきこゆる顔なべい事にやは。さまざま道の絆もえさりがたくのみはべれば『今はあながちに見え、かからでもありなむ』とおぼしなるとも、なほ慕ひきこえぬべき心の程のあさましきなどは、さりとも見知りたまふらむものを。」(376頁)ここに至って、女君は人生態度の変化を自覚している。そんな折に「あやにくな宿世」を女君に嘆かせるような事件が起こる。女一の官の病床に女君の生霊を名乗る物気が現れたのである。再び我が身を襲った危機に、女君は何を考へどのように対処したのであろうか。以下、生霊事

件に対する女君の反応から、彼女の心の変化を検証したい。まず、生霊事件の性格を考えたい。この生霊事件については、関根慶子氏が検証されているように、偽生霊であったと考えられる。しかも、男君と女君の仲を妬む大皇の宮が、この偽生霊事件をうまく利用した(409・410頁)と思われる。

次に生霊事件に対する女君の反応を考察したい。男君が女君の身の潔白を信じ弁明する効もなく、生霊の噂は女君の耳に届く。

「もとより、心のいとおろかに、浅うなりにければよく思ひも入れて、ちぢの憂きふしをあまり思ひ過して来て、言ひ知らずうとましよう、音聞ゆゆしき耳をさへ聞き添ふるかな」(411頁)

と嘆くと共に、女君は、

「今となりては、うちとけ頼みきこゆべきものとは思ひだに寄らぬことにて、まことに、いみじうつらからむ節にも、身をこそ恨みめ、人をつらしと思ひあくがるる魂は、心のほかの心といふともあべい事にもあらぬものを。」

(412頁)

と生霊の噂を否定している。「たとえ自分では意識できない心の奥の心としてもあらうはずもないことだのに」と身の潔白を主張している。しかし、女君はこの生霊を本当にはつきりと否定できるのであろうか。

次に挙げる女君の嘆息に着目したい。

「いで、あな心憂の心や。この月ごろ、我ながらも、か

ならずつらき節多く、便なきことも出で来なむものをと、

思ひ離れ、飽き果て、籠り居なむと思ひ寄りしものを。

内の上の御事の、せむかたなく、わびしう思ひまどはれしままに、かの人の御陰につきて、誘はれ出でなむとせしほどに、心弱く乱れたちて、今までながらへて、かかる事を聞くが、我ながら思ひとるかた強からず、口惜しう、ものはかなき心の怠りなり」(412・413頁)

「このような忌まわしい生霊の噂が流れる誘因となつたのは自分の弱い心である。心の秩序を破り男君との関係を復活させた自分自身に責任があるのだ。」女君は、一度は生霊を否定しながらも、そのような危機に直面せざるを得ない我が身を自省している。殊に、自分の心を「あな心憂の心や」「ものはかなき心の怠り」と自省しているのは、女君の心の内に生霊を否定できない「負い目」が存在しているからではないだろうか。実際に現れた生霊は、その言からも明らかに我が身から抜け出たものではないが、女君の心の内では女一の宮に対する妬みが彷彿し、いつかは生霊となり得たのではないだろうか。女君は厳しい自己統制に抑圧されて、今まで無意識下に置かれていたもう一人の女としての自分を確認せずにはいられなかったに相違ない。それほどこの生霊が、女君自身にとって「この上もなくレアルな、否定したくとも否定しきれぬ実在として意識されている」のである。

そして女君の自省は、

「いみじう心の乱るるこそは、かの十五夜の夢に、天つ

乙女の教へしきまの、かなふなりけれ」(413頁)

と続く。ここに至って、女君は改めて天人予言「あはれ、あたら人の、いたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな」(44頁)の的の中を自覚する。我が身の存在をも揺るがすこの生霊事件で、またしても女君は男君との「前の世まで恨めしき御契り」を嘆かずにはいられなかった(413頁)。このように「心のほかの心」「心を乱したまふべき宿世」「あやにくな契り」の自覚は、女君を絶望的な境地に追い詰めるには十分であったと思われる。

以上のように、生霊事件における女君の心の変化を考察してみたが、果して生霊事件の物語構成上の設定意義は何であったのだろうか。女君の次の歌から考えたい。

今のごと過ぎにしかたの恋しくはながらへましやかかる
憂き世に(414頁)

この上もない絶望感に陥っている女君は「このつらさに堪えて生き長らえる気がしない」と嘆いている。「今の苦境に比べると、かつての苦悩など恋しい思い出に過ぎない。なぜならば、今の自分がかつての厳しい自制・秩序も乱れ、自分を信じるこのできないところまで追い詰められているからである。従ってこの世に生き長らえる価値もなく自信もない。」と、女君は我が身の現在の苦悩をこの歌に託しているように思われる。

このように考えてくると、女君は生霊事件を契機として出家を強く望むようになったことがわかる。すなわち、生霊事件は「十五夜予言の悲しい宿命的中を思わせ、波瀾

の過去まで今は恋しいという悲痛の絶頂を味わわせ、ついに出家にまで導こうとして」^(出)設定されたと考えられる。かくして、女君は絶望的な境地からの脱出(出家)を決心するようになる。

(3) 出家決意

数々の苦慮を経験し、絶望的な境地に立たされた女君は、自分の生への唯一の救いとして出家を志すようになったが、彼女の心は母としての立場を考えると重かった(426頁)。しかし父入道の住む広沢で仏道に精進する父と前齋宮の姿を目の当たりにして、女君はますます出家への思いを募らせるのである。

齋宮の御有様を、(女君は次のように見ている)「あはれにうらやましくも行ひすませたまふかな。幸などいふかたこそ、人にすぐれむこと難く、思ふにかなはざらぬこの世を捨てて、かやうに行ひてあらむことは、いとやすかべいことなりかし。」(455頁)

今や、女君は生きることへの絶望感からの唯一の救いとして出家以外には考えられないのであろう。

「心強くかけ難れ入り居なましかば、人を憂しと思ひ分く節もなく、我が世に知らぬ名も流れで、いかに残りある心地して目やすかべかりけり」と、もののみ悔しきに、(439頁)「世にありとだにきこえたてまつらむは、恥かしかべいわざかな」とおぼしめし入りたり(448頁)「いかく物を思ひ入らむに、いかでか苦しからぬやうあら

む。命もあまりはえ堪えじ」(455頁)

女君は相変わらず過去を後悔しているが、その後悔の根底には出家への強い願望がある。男君に対しても、周囲の人々に對しても、自分の存在自体が「恥かしきもの」と苦慮しており、しかも我が病(実は男君の子を宿していた)を思うと、出家以外に救われる道はないと考えるのも当然である。

「憂きをもつらきをも尽きせず思ひ知り、うとましげなる名をさへ流し添へ、つねに世にもありつかず、浮き漂ひてのみ過すを思ふに、いみじく口惜しく、まして後の世いかばかり暗きより暗きに入らむ道のたどりも堪へがたからむ。」(456・457頁)

という女君の心の吐露は、生への絶望感からの唯一の救いとして出家を決定した彼女の「強い意志」がうかがわれる。ここで女君が出家に託した願いは何であったのか考えたい。女君は出家の意志を父入道に次のように語る。

「夢などにも、世にながくはあるまじくのみはべるを、世に、今はなにとありとも同じことに、惜しかべくもあらずなり果てにはべるものから、あいなき人の思ひやりごとなどもはべるを、世を背くさまにてや、もし、いましばしながらふるやうもはべる。また、言ふかひなきにても、後の世の頼みもさてはあるやうもやとこそ思ひたまふれ」(460頁)

「あやにくな宿世」を背負うが故に現世で苦悩の日々を送ってきたからこそ、女君は出家することにより「この世の

煩いから逃れたい。勤行を積んで、せめて来世には自分の理想とする平穩な日々を送りたい。」と切望していたにちがいない。この思いは、

「何事も人にすぐれて、心にくく、世にも、いみじく有心に、深きものに思はれて、なにとなくをかしくあらばや」(455頁)

という「世間一般の常識に照らして非のないものでありたい」という所に基準が置かれている(注10)。女君の人生觀と照応している。

このように、女君の出家に託した願いは切なるもので、自分の生死をかけた問題として女君は出家を考えている。幼い頃に思い描いていた人生設計は、我が身の背負う「あやにくな宿世」の為に脆くも崩壊してしまった。このまま俗世に留まり生き長らえたとしても、業の深い身故に多難な人生であろうことは目に見えている(463頁)。女君が出家を決定した根拠は、単に苦難からの逃避のみではなく、「出家」に自分の理想とする人生実現への最後の可能性を見出したからであろう。自我に目覚めてきた女君であるが故に、この出家願望は強く、決意は堅かったにちがいない。その後、女君の妊娠が明らかとなり、女君は出家を断念せざるを得なくなる。

「なぞや、行くべきかたはなくもある身の有様かな。後の世をだにと思ひとりしことも、罪さへ浅からざりければ、ただ今はかなはずなりぬ。恨めしき節多く、憂きことしげく、嘆きつくすべき身にこそは」(505頁)

多難な実人生と閉ざされた出家との間で揺れ動く我が身を嘆く女君。「嘆きつくす身」を痛いほど思い知らされ、ますます現世に絶望を抱くようになる。「自らのつらい運命を引き起こしている、いわば元凶とも言える男君との契は、子供という存在を通して、逆に、自分をそのつらい現世に引き止めずにはいない」⁽⁵³¹⁾現実に立ち向かう女君の心境は、「恨めし」「憂し」「嘆きつくす」といった絶望的なものであろう。

結局、出家は実現しなかったが、この出家願望は後々々で女君の人生観の中に存在し続ける。

「かくてもいつまであべき身ぞ。もし平らかにあらば、つひに思ふ本意とげてこそあらめ。」(534頁)

今や男君の北の方として(傍目には)安定した生活を送っている女君ではあるが、彼女の心は男君から離れており、ひたすら出家への機会をうかがうのみである。愛する子供たちとの交流は、確かに現在の支えになっているであろうが、以前のような家族の中で自分の立場は崩壊し、男君は頼りにできるような人ではないという状態において女君は孤独であった。現世での人生が、自分の背負う「あやにくな宿世」の自覚と自省の繰り返しに過ぎなかったと思いつつ、今となっては、女君の心はもはや現世にはないのである。

(男君を)かりそめのよそのもののように思ひ放ち、うちとけて恨み顔なる気色、夢にも漏さず、(女君は)「こは、あるまじき世に、しばしめぐらふぞかし」とおぼし

絶えて、(534頁)「幼き人々の数々見捨てがたく、これかれの御扱ひを、我さへ知らずなりなば、いかがはと思ふばかりに、ながらふるにこそあれ。」(568頁)

「現世は自分にとって「かりそめの宿り」に過ぎないのだ。少しの間立ち交らっているだけのこと。それも子供たちとの契りを断ち難いため、ここに生き長らえているに過ぎない。」女君の述懐は、自分の立場を過去・現在・未来において直視し判断したものである。子供たちによって現世に引き留められている自分に、母としての姿は見ても女としての態度は見出せないのである。

このように、出家を決意してからの女君は、以前とは違い、宿世に翻弄されてきた自分自身を直視し、その根源である「あやにくな宿世」に真っ向から立ち向かうような心強い女性に成長している。結果として出家は実現しなかったが、今後の人生態度を女君自身考えたという点で、この出家決意は彼女の人生における一つの大きな転換期であると思われる。そしてこの転換期を経て、女君は自らの人生を方向づけたに相違ない。

自我の確立を果たし、人生態度を確認した女君が、今後どのように人生に対処してゆくかは末尾欠巻部分に待つところであるが、本論では省略する。「夜の寝覚たゆるよ」なき女君の人生は、この第三部を経て大きな変革期を迎えることと推測される。

結び

『無名草子』に総評された『夜の寢覚』とは以上のような作品であった。ここで改めて『夜の寢覚』における「寢覚」について触れたい。

「寢覚」については、阪倉篤義氏が指摘されているように、第一部・第二部においては「恋の寢覚（男君の寢覚）」、第三部においては「哀傷の寢覚（女君の寢覚）」が描かれている。そして、物語が女君の変貌と共に発展すると同時に、「寢覚」の性格も変化しているのである。

では、作者の意図する「寢覚」はどちらの「寢覚」であるのか。物語の性格から考えると「哀傷の寢覚」の方であろうと思われる。この物語の主題が「浅からぬ契り」で結ばれながらも「心づくしなる例」である「寢覚の御仲らひ」、殊に「あやにくな宿世」を背負う女君の生き様にある以上、その女君の「寢覚」が『夜の寢覚』の「寢覚」であることは疑う余地のないことである。そして『夜の寢覚』の「夜」は「明けることのない闇」を意味し、それは「女君の人生―出家さえも閉ざされた心の闇」を象徴しているのではないだろうか。「夜」が明けることのないように女君の苦悩に満ちた人生は開かれず、それ故に「哀傷の寢覚」に苦しむのである。女君は数々の苦悩を経験し、一人の女性として（意志）を持つまでに成長した。それは人をして「心強し」と驚嘆せしめるほどであった。しかし女君の前途は暗い。絶望的な閉塞感を打ち消すにはあまりにも宿世の業が深すぎたのである。

結局、作者の意図する主題は女君の人生の明暗であった

ようである。意志を持つ理想的な女性への成長という明の部分と、一方で閉ざされた人生への悲哀・嘆きといった暗の部分を描いている。そして、王朝女性の一つの意志の確立・精神的成長といった画期的な素材であるにもかかわらず、作者が王朝人であるが故にその閉塞感を取り除くことはできなかったようである。確かに、作者の意図した主題は、当時の物語には珍しく女主人公の自立成長する過程であり、その精神的成長過程を描くことよって「生の女の物語」を描きたかったにちがいない。そして、その主題である女君の成長変貌を色濃く描くために、天人予言的中を軸に物語の展開を意図したのである。しかし、つきまとう女の人生の閉塞感を感じ得ず「夜の寢覚たゆるよなくとぞ」と余韻を残して、現存本最後に漂うのである。

最後に、『夜の寢覚』に対する野口元大氏のご指摘（注4）を用させていただきたい。「この物語の世界は、貴族社会の全身像を明暗さながらに映し出す源氏の世界に比べれば、確かに狭小であり、かつ光に乏しい。しかし、狭くはあっても深く、また暗くはあってもたじろいではない。『夜の寢覚』はそんな作品である。」

注1 新潮日本古典集成『無名草子』 桑原博史氏校注

新潮社

注2 日本古典文学全集『夜の寢覚』 鈴木一雄氏校注

小学館

―第一部 現存本巻一、二―

第二部 中間欠巻部分

第三部 現存本巻三・四・五

第四部 末尾欠巻部分

注 3 横井孝氏『寢覚』論―「女の物語」として・序説―

(日本文学 昭51・5)

注 4 永井和子氏「ねざめ」の構造(『寢覚物語の研究』

笠間書院 昭43・7所収)

注 5・6・10・11 棚橋真佐子氏「寢覚」の女君について

―母としての立場と人生態度―(国文昭50・7)

注 7・9 関根慶子氏「寢覚」の生霊をめぐって―偽生霊

とその位相―(平安文学研究昭37・11)

注 8・14 野口元大氏『夜の寢覚』の主題と構造―「夜の

寢覚たゆるよなくとぞ」―(下)(文学昭42・5)

注 12・13 阪倉篤義氏「よるの寢覚」と「よはの寢覚」(国

語国文昭39・10)